

---

# 朝の一時

山本 悠次

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

朝の一時

### 【Zコード】

N4730

### 【作者名】

山本 悠次

### 【あらすじ】

他人にとつてそれはどうでもいい時間、でも2人にとってそれはとても大事な時間。

あなたもこんな時間を過ごしたくありませんか。

ある冬の日の朝。

みんなはしている受験勉強をしてない俺は今朝もいつも通り寝起きがいい。

なぜ俺が勉強しないかはさておき、俺はいつもと同じ時間に家を出て中学校に向かう。

学校は家から徒歩15分、近くも遠くもない場所にある。いつも通り教室に入ると、やはりいつも通り誰もいない。自分から早く来ときながらあれだが、やっぱり誰もいない教室は寂しい。

現在の時間は7時42分、みんなが来るまであと15分、朝のSTが始まるまで40分ちょいといつたところだ。

基本的にはこの時期に3年生は部活を引退していることもあり、朝練がない3年生の教室は他の学年の教室よりもよりいつそう静けさを増している。

今日は誰が1番に来るかなあ、そんはことを思いながら俺は自分の席にかばんを置く。

そんな静寂な一時を打ち壊すがごとく、勢いよく扉を開ける音がする。

「あれ？ 1番だと思ってたのになあ」

そんなことを言いながら入ってきたのは、同じクラスの小金沢美香だ。ついでに席も隣だ。

予想通りだつた。

今日は美香が最初に来ると思っていた。

「おはよう、美香」

「うん、おはよう拓海」

女の子にどう接していいのか分からぬ俺にとっては唯一気軽に喋れる女友達だ。

「拓海つてば、何時に来てるの？ いつも拓海が教室に1人いるよねえ」

「前の前も聞かれたがとりあえず答える。  
「いつも時間見てないから分かんないけど、美香が来る5分前くらいだよ」

「早すぎだよ、たまには1番を譲つてよ  
そう言われても時計なんて見ない拓海にとつて何時に行けば1番を譲れるのかなんて分からない。

「そういう美香こそ、もっと早起きしたらいいじゃないか」

「私はいつも早起きしてるよ、でも女の子の仕度は男の子の3倍はかかるの」

語尾に音符マークがつきそうな口調で答える。

男の子の3倍の仕度って化粧とかだらうか、でも美香にそんな仕様は見当たらないしなあ。

うーん女は不思議だ。

「でも、拓海はなんでそんなに早く学校に来るの？」

特に意味はないんだけどなー、なんて答えよう……

「……美香と喋つてるのが楽しいから、かな」

とたんに美香の顔が赤面し、たじろぎだす。

「あんたよくそんなこと普通に言えるわね、恥ずかしくないの！？」

？」

えっ？ なんでそんなに慌ててるの？ 変なこといつたかなあ？  
「えーっと、なんでそんなに慌ててるの？ へんなこと言つた？」

本心を言つただけなんだけど

その言葉が美香の顔をよけいに赤くする。

何が美香をそこまで焦らせているのかまったく気付いていない拓海はさらに追い討ちをかける。

そつか、一緒に喋るといつのが女の子にひとつでは恥ずかしいのか。

少し時間が経つ。

「分かった、俺はこの一時が好きなんだ！」

その一声で美香はどどめを刺される。

美香は興奮してゐるせいではやとちりをする。

そうか、これは愛の告白なんだ。

すぐに行動を起こしてしまった美香は拓海に言つ。

「拓海、あなたの気持ちは分かつた。私もあなたのことが好

『ういーっす！』

けたたましい音とともにに入つて来たのは、拓海の友達。

「おう、拓海！ 朝から2人でラブラブだなあ」

「なんでそうなるんだよ」

『ハハハハハハハハハハ』

美香の頭は真っ白になつていくのであった。

(後書き)

このお話は友達の実話で2人の男女が楽しそうに喋っていて教室にはいりづらく、見聞きしてしまったものです。

実話をまとめるのが非常に苦手なのでこの話については、まったく自身がありません。

(もしかしたら消したほうがよかつたかも……)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4730j/>

---

朝の一時

2010年12月31日05時57分発行